

〈書評〉 Francesco Marrone, *Realitas obiectiva: Elaborazione e genesi di un concetto*, 2018, Edizioni di Pagina.

榮福 真穂

本書はフランチェスコ・マローネ（現バーリ大学准教授）による「対象的レアリタス *realitas obiectiva*」概念史研究であり、レッツェ大学（現サレンテ大学）に提出された著者の博士論文を大幅に再編したものである。著者のマローネはデカルト研究からキャリアを開始しイタリア語版のデカルト著作集の翻訳等にも携わる一方で、著名な中世哲学研究者であるパスクアーレ・ポッロとともに『プーリアにおけるフランシスコ会の文化的遺産』を刊行しており、後期・近世スコラへの造詣の深さが窺える。ガンのヘンリクスから 17 世紀スコトゥス主義にいたる系譜を追跡する本書には、そうした著者の力量がいかに発揮されている。本書は序論と結論を除く 8 章構成で対象的レアリタス概念の歴史的展開を丹念に辿ることにより、この概念が 14～16 世紀のスコトゥス主義者たちによる「存在の一義性」をめぐる議論の中で練り上げられたものだということを実証的に示している。この結論は独創的かつ驚くべき貢献だと言えよう。さらに、マイナーな思想家たちのテキストの中から特に重要なものにかんしてはラテン語原典の一部抜粋を収録している点で、資料的価値の高い一冊でもある（付録 A：トロンベッタ『スコトゥスの形相性論考における命題集』、付録 B：ジョン・カノン『アリストテレスの『自然学』第 8 巻についての諸問題』、付録 C：タルタレ『命題集の四巻本におけるきわめて明晰な註解あるいは報告』、付録 D：ムーリス『精妙博士の精神に対する形而上学的諸事物の 3 巻本』）。

本書が対象的レアリタスに関する従来の研究と一線を画す点は、端的に言えば、デカルトの「不在」（p.13）にある。評者もまたデカルト研究者として対象的レアリタス概念に関心を持ってきた者の一人であるが、デカルト的ターミノロジーの源泉の解明を期待すると肩すかしを食らうことになる。このような態度は、むしろ著者によって批判される。本書は、デカルト研究の文脈に囚われずこの概念の歴史を純粋に追跡した初めての本格的な研究だと言えるだろう。本書の目的は、デカルトの用語の起源の探求ではなく、むしろそれが一つのヴァリエーションとみなされるような別の系譜の探求である。序論で指摘されているように、これまで解釈者たちはデカルトの対象的レアリタスの先例をスアレスやゴクレンウスらの「対象的概念 *conceptus obiectivus*」に求めてきた。この語は多くの場合において形相的概念と対をなすので、デカルトにおけるレアリタスに関する「対象的」-「形相的」の対比との類似を見ることができるからだ。しかし、このようにデカルトを起点とした調査を行うことは、対象的レアリタスの「正史」と呼ぶべきものをむしろ「隠してしまう」（p.15）と著者は言う。スアレスやゴクレンウスに対し、著者が対象的レアリタス概念の「正史」とみなすのは、ドゥンス・

スコトゥスに端を発し 17 世紀に至るまで連綿と続く「形相主義者 formaliste」と呼ばれるスコトゥス主義者たちの系譜である。この系譜を丹念に追っていく作業こそが、本書の紙幅の大部分を占めている。

各章の内容を見ていこう。まず 1 章の主役となるのは、対象的レアリタス概念の歴史において決定的な役割を演じたトロンベッタ (Antonio Trombetta, 1436-1517) である。この種の系譜研究には珍しく、本書の記述の順序は時系列に沿っていない。著者がトロンベッタを起点に本文を開始するのは、ひとえにその重要性の高さによる。トロンベッタは先行者シレクト (Antoine Sirect, 生没年不明) の議論を批判的に継承しつつ、形相性 *formalitas*、把握可能性 *conceptibilitas*、理拠 *ratio* といった概念との関係を考察していくことで、対象的レアリタスおよびレアリタスそのものの概念配置を画定させようと試みる。先行するスコトゥス主義者たちが形相性のうち「それ自身において把握可能であること *conceptibilitas per se*」だけに対象的レアリタスを認め、対象的レアリタスを形相性にいわば下位概念として従属させていたのに対し、トロンベッタは形相性と対象的レアリタスとの両方を「それ自身において把握可能であること」に限定することで、形相性と対象的レアリタスとを同等の地位に置く。こうした議論の意義は続く 2 章においてより明確になる。2 章では、対象的レアリタス概念がもともとはいわゆる「存在の一義性」の問題系の枠内で醸成されたものであることが明らかにされる。まず、把握可能性の二重の基準、すなわち「それ自体で／他によって」把握可能であるという純粋に認識論的基準と、「それ自身の本性から／因果的に・結果として」把握可能であるという存在論的基準が確認され、じつは第一の基準のみでは対象的レアリタスの条件として十分でなかったことが示される。対象的レアリタスは思考内容と知性の外の基体 *subjecta* とのどちらかに排他的に属するのではなく、より包括的なものとしての理拠 *ratio* に属するのであり、それゆえ第二の基準もまた必要となるのである。著者が描き出すのは、トロンベッタがこの理論的仕掛けを用いて「存在の一義性」の難問を解決しようとする様子である。存在の一義性の難問とは、存在 *esse* そのものの基体的レアリタス *realitas subjectiva* の一義的な適用を神と被造物とに行なったことで生じる。これを回避するためにトロンベッタが出した方策は、その一義的に適用するものの範囲を存在の理拠ないし存在概念の対象的レアリタスのみに限定するというものであった。本章ではさらに、存在概念の対象的レアリタスが知性による「抽象」ないし「切り離し *praecisio*」を経てはじめて成立するものであるという議論が紹介される。これにより、存在概念の対象的レアリタスは知性による無根拠な捏造物ではないと保証されるのである。

このトロンベッタによる議論によって、スコトゥス以降も実在論的傾向の優位が保持されてきた形相主義の伝統は、(主に対象的)レアリタスの用法を通じてより認識論的傾向に引き付けられ、存在論と認識論との紐帯の問題が前景化されることとなった。

著者も強調するように、これこそ対象的リアリタス概念の歴史におけるトロンベッタの（あるいは部分的にはシレクトの）独自の貢献であり、また評者のようにデカルトないし近世哲学に広く関心を寄せる者にとっても、非常に興味深い帰結だと言えよう。以上に見た 1 章および 2 章から構成された第 1 部は、本書のいわば理論的基礎を成しており、本書全体から見ても最も力の入った専門性の高いパートとなっている。

3 章以降も簡単に概観しておこう。3～6 章から成る第 2 部は、トロンベッタ以前の形相主義の成立過程に充てられている。まず 3 章では、ガンのヘンリクス（Henri de Gand, 1217?-1293）が取り上げられる。ヘンリクスは「存在の一義性」の可能性を明確に否定したことで、結果的にこの問題系そのものの成立の端緒を開いた。ヘンリクスにとって事物と概念との間には、著者が「同型性の原理」と呼ぶ強い結びつきがあるので、神と被造物との間にはたとえ概念のレベルにおいてさえ一義性を認めることができないのである。こうした一義性の不可能性の議論を受けてなお、「存在」概念の一義的適用の可能性やその適用条件の探究を試みたのがドゥンス・スコトゥス（Johannes Duns Scotus, 1265/66-1308）である。まず 4 章では、スコトゥスがヘンリクスにおける概念と事物との同型性の主張を緩和することで、存在概念の一義性の存続を図ったことが明らかにされる。スコトゥスは概念の構成と事物の構成とを切り分けるという方策を取った。だが、それによってスコトゥスが直面した問題が、概念を事物の側からいかに根拠づけるかという問題であり、これが 5 章において取り上げられる。スコトゥスはこの課題に応答するために、「リアリタス」を概念的ツールとして用いる。「存在の一義性」の問題とリアリタス概念とは、このような仕方では結び付けられるのである。以上のようなヘンリクス-スコトゥス解釈は、おそらくそれほど独創的なものではない。しかし、著者なりの定式化を挟みつつ、テキストの引用とその解釈を堅実に積み重ねる著述スタイルにより、「存在の一義性」という問題系の成立経緯を原典に即して理解したい者にとって、格好の手引きとなってくれるだろう。最後に 6 章では、対象的リアリタスという語彙の発明者とみなされる、14 世紀後半に活躍したジョン・カノン（Johannes Canonicus, 生没年不明）が取り上げられる。ジョン・カノンはスコトゥスがリアリタスと概念との間に設けた対比を、二種類のリアリタス（基体的／対象的）の対比に置き換えた。著者によればこの対比のもとで、歴史上初めて「対象的リアリタス」という連辞が現れたのである。以上のようなシレクト・トロンベッタ以前の経緯が第 2 部で語られる。

続く 7～8 章から成る第 3 部は、トロンベッタ以降の対象的リアリタス概念の展開に充てられる。7 章で取り上げられるタルタレ（Pierre Tartaret, ?-1522）は、16 世紀にパリ大学の学長まで務めた影響力の大きい人物であり、その著書も非常に広く読まれた。著者はタルタレを、対象的リアリタス概念の普及にとって決定的な貢献をなした人物だとみなしているが、他方で、知解可能性が明示的にリアリタスの本質的特徴と

なった点に彼の理論的貢献を見出している。こうした傾向は 17 世紀にさらに強まり、また意外な展開を見せることになる。8 章で明らかにされるのは、17 世紀のムーリス (Martin Meurisse, 1584-1644) において対象的レアリタスは存在の一義性の問題系をものでは越え、創造以前の「創造可能なもの」の定位をめぐる議論に用いられるようになったということだ。ムーリスにとって対象的レアリタスとは、正当に知解されたものを単なる虚構から区別する、無矛盾性によって支えられた知解可能性を意味するのである。

このような著者の議論を追跡してみることで、私たちには本書の特徴的な傾向性が見えてくる。それは、本書は対象的レアリタスの「対象的」よりむしろ「レアリタス」のほうに重心を置いている、ということである。本書がもともと、2012 年の *Ricerca in Futuro* 基金での同氏の研究プロジェクト「有・事物・レアリタス：中世からデカルト・カントまでのスコラ的伝統における存在論の語彙の変遷」に端を発するものだという事実も、著者の根本的関心の在処を示しているように思われる。*realitas obiectiva/realitas formalis* のうち形容詞に注目した場合には、*formalis/objectiva* の組による（たとえばスアレスやゴクレニウスとの）連続性に目を引かれがちだが、名詞に注目した場合には、むしろ *realitas subjectiva* と対をなすような *realitas obiectiva* の連続性が浮かび上がってくる。従来の研究と本書との差分は、この重心の違いから必然的に生じてくるものであるように思われる。本書で強調されたのは二つの系譜の「重ならなさ」であったが、同時代にともに影響力を持った両系譜の間には何らかの相互作用があったと見るのが自然であろう。しかしこの主題は、著者のさらなる研究において期待される、あるいはむしろ我々読者が引き受けるべき課題である。

また、浩瀚な本書で取り上げられるトピックを本稿で網羅することは叶わなかったが、細部の議論も示唆に富んだ論点を多く含んでいる。たとえば、1 章ではトロンベッタによる理拠 *ratio* の区別、すなわち「動かす理拠 *ratio movens*」「終着する理拠 *ratio terminans*」の区別が取り上げられる。認識の「対象」は後者の資格を満たさねばならないが、必ずしも前者である必要はない。著者はここに、「対象」に帰属する因果性（認識を引き起こす起点となる）と対象性（認識作用の終着点である）との分離の契機を見てとっている。こういった議論は、『省察』における神の實在の第一の証明に関心のある者にとって非常に興味深い。この証明内で観念の対象的レアリタスを因果の関係項に組み込んだことは、デカルトによる革新の一つであるからだ。しかし、本書において著者がこうした論点からデカルトへの道筋や補助線を引くことはない。本書の成果を引き受けてデカルトの当該概念を再検討することは、我々読者の仕事として残されている。本書はたしかにデカルトの対象的レアリタス概念研究に積極的な成果をもたらすものではなく、またそれを意図されてもいない。それにもかかわらず、デカル

ト研究者、ひいてはすべての近世哲学研究者にとって、間違いなく啓発的な一冊であると言えよう。